

# ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

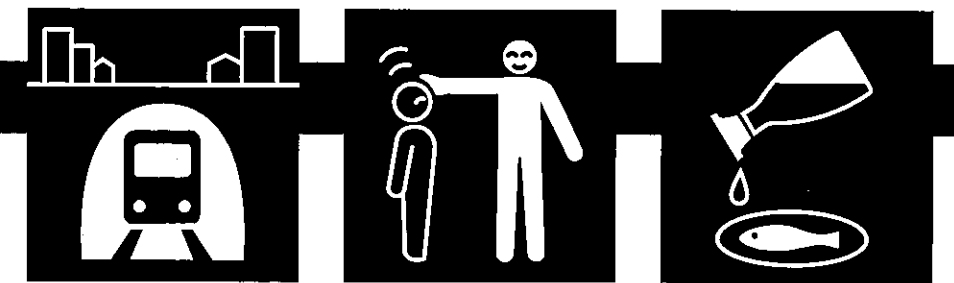
## アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル No. 56

2008 (平成20) 年9月25日

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)  
共生社会の実現を願う妖精「インクル」 「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました

### 目次 / contents

- 第9回法人賛助会員報告会 “次の10年” に向けて何をなすべきか  
シンポジウム「日本発・ISO国際標準化が与える世界への影響」(高嶋健夫) ..... 2  
「東京メトロ副都心線のバリアフリー化の取り組み」(古賀直紹) ..... 4
- アクセシブルデザイン普及に向け、協力を呼び掛け  
機構、世界盲人連合(WBU) 総会で発表(松岡光一) ..... 6
- 自分だけの「バリアフリーブック」を作ろう！  
国立科学博物館「夏休みサイエンススクエア」に共用品ブース(森川美和) ..... 7
- 跡見学園女子大生、機構で就業体験研修(森川美和)  
「インターンシップを通して」(青柳綾) ..... 8  
「サイエンススクエアを通して」(諏訪彩香) ..... 9
- <随想 私と共用品>第34回  
ALSの父と家族をつないだ「水中ボード」(玉木克志) ..... 10
- <この業界・この団体> 日本ALS協会  
筋萎縮性側索硬化症と共に闘い、歩む会(高嶋健夫) ..... 11
- <寄稿>全盲者の立場で「模擬裁判」の裁判員役を務めて(高橋玲子) ..... 12
- <ニュース&トピックス>  
新刊紹介「2008年版JISハンドブック38」ほか(高嶋健夫) ..... 13
- <キーワードで考える共用品講座> 第54講  
「伝統的工芸品と共用品」(後藤芳一) ..... 14
- <事務局長だより>騒音の中で生まれた「共用サービス」(星川安之)  
共用品通信 ..... 15
- <わが社のエース> 味の素㈱「ほんだし®」  
「使いやすく、おしゃれ」に容器を全面リニューアル(高嶋健夫)  
奥付 ..... 16



■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T0103)」に収録されている絵記号例。左から「地下鉄」「褒める」「しょうゆ」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

## 第9回法人賛助会員報告会 “次の10年”に向けて何をなすべきか アクセシブルデザインの現状と課題

財共用品推進機構の第9回法人賛助会員活動報告会が7月14日、法人賛助会員関係者ら約100人が参加して、東京・水道橋の東京ドームホテルで開催された。今年のテーマは「アクセシブルデザイン最新報告～‘Second Decade’に向けての展望と課題」。星川安之専務理事による第9期（平成19年度）の活動報告に続き、「日本発ISO国際標準化が与える世界への影響～アクセシブルデザインの導入でモノ作りはこう変わる」と題したシンポジウム、さらに、東京地下鉄(株)営業部施設課長・古賀直紹氏による講演「東京メトロ副都心線の取り組み」が行われた。その概要を誌上再録する。  
(高嶋健夫)

### シンポジウム

## 日本発・ISO国際標準化が与える世界への影響

パネリストは相澤幸一・経済産業省環境生活標準化推進室長、山内繁・早稲田大学人間科学学術院健康福祉学科教授、佐川賢・(株)産業技術総合研究所人間福祉医工学研究部門上席研究員、高橋玲子・(株)タカラトミー安全・環境統括室社会環境課係長の4氏で、これに星川安之・機構専務理事が適宜加わり、司会は本誌編集長の高嶋が担当した。

いずれも、ISOや日本工業規格（JIS）における標準化作業に直接関わっている専門家で、それぞれの立場からアクセシブルデザイン（AD）の国際標準化の意義と今後の展望と課題について語り合った。ここでは、各氏の発言要旨を1人ずつまとめて紹介する。

### 官民の理想的なコラボレーション

#### 経済産業省 相澤幸一氏

相澤氏はまず、AD標準化の意義を次のように総括した。①民間が汲み上げた消費者ニーズに基づく配慮を、関係省庁・専門機関が規格化するという点で「民と官の理想的なコラボレーションの成果」である、②業界内、業界間、業界とユーザーが連携して技術・手法を共通化した点で先見の明のある取り組みである、③ADは「社会ニーズの具体化」と

いう点で標準化施策の“1丁目1番地”であり、大きな波及効果が期待できる、④AD規格はJISをISOを通じて国際標準化させるという点で、世界に向けた機運作り・仲間作りを日本が主導で進める国際貢献である。

今後の課題としては、「体系化とさらなる整備」を指摘した。AD規格はこれまで「できるところから手掛けてきた」のが実情であり、今後は規格作りのベースとなるデータの蓄積やその活用を進め、成果を積み上げていく必要性を強調。今後のいっそうの普及に向けては、JIS化・ISO化によって国・自治体などの公的調達がしやすくなるメリットを生かし、AD規格に準拠した共用品の普及促進を図るべきとしている。

最後に、企業活動におけるAD規格の活用に関しては、「先は長く、まだまだやることが多い」としたうえで、ADに関するアンテナを高く掲げ、新しいニーズ調査を推進するなど「当事者意識を持ってADの普及に参画してほしい」と訴えた。

### 世界をリードする大きなリソース 早大教授 山内 繁氏

ISO/TC173国内委員会議長などISO関連

■シンポジウムのパネリスト各氏。  
右から高橋玲子氏、佐川賢氏、山内繁氏、相澤幸一氏、司会の高嶋



の要職を務める山内教授は、福祉用具の専門家の立場から発言。「専用品（福祉用具）は障害者にとって必要不可欠であり、すべての製品を共用品化することはできない」としたうえで、「専用品と共用品はクルマの両輪。多くの製品は両者の中間に位置しており、共用品化の推進は今後ますます重要になる」と力説した。

日本の企業については、国際連携の視点で「世界の中での共用品の価値をもっと理解すべき」と指摘。特にAD関連のモノ作りの面では、すでに多くの関連JISを整備していることに示されるように、「日本は世界をリードしており、大きなリソース、パワーを持っている。そのことを自覚して、次のステップをめざしてほしい」と訴えた。今後の課題は、「認知領域に関わる研究開発はまだ始まったばかりである」として、この分野での共用品開発が加速されることへの期待を述べた。

### 今後の課題は「ツール・パーツの充実強化」

#### 産総研 佐川 賢氏

ISO/TC159でアクセシブルデザイン・アドバイザリー・グループ（AGAD）議長を務める佐川氏は、人間医工学の研究者の立場から、「ADに関する問題分析・基礎研究は、その成果を指針や規格というわかりやすい形で提供でき、いわばシナリオとゴールを明確化できる」ことを大きな特色として指摘。約2500人の研究スタッフを抱える産総研の幅広

い研究分野の中でも「ADは人間に直接つながる『ハートのある研究』である点にやり甲斐がある」と語った。

今後の展望についても、人々の暮らしをよりよくするという意味で「ADには基本的には明確なシナリオがあり、ゴールである国際標準作りに参加する人々の輪を広げていきたい」と強調。具体的な取り組みとしては、「ISO/IECガイド71」をベースに技術支援レポートやデータベースなどの整備を進めながら、個別規格の策定作業を推進。企業が共用品を開発する際に役立つ「ツールやパーツを取りそろえていきたい」としている。

### 世の中を変える創造的な企業活動を

#### タカラトミー 高橋玲子氏

TC122/WG9エキスパートなどを務める高橋氏は、玩具メーカーで商品開発を担当している立場から、「ADは生活をよりよくする手段であり、その規格も夢ではなく、実用性のあるものでなければならない」という認識を示した。そのうえで、今後のさらなる普及に向けて、「ADは世の中を変える力を持った考え方であり、企業はその力を生かそうという明確な目的を持った創造的なモノ作りを推進してほしい」と呼び掛けた。

今後の課題としては、経営トップの理解と指導力、表彰制度などの実務担当者へ勇気を与えるインセンティブ作り、地道な活動の積み上げなどの必要性を指摘した。

# 東京メトロ副都心線のバリアフリー化の取り組み

こがなおつぐ  
古賀直紹・東京地下鉄(株)営業部施設課長



東京地下鉄  
営業部  
施設課  
課長  
古賀直紹

副都心線は、和光市駅～渋谷駅までの16駅、20.2kmを運行する東京メトロ9番目の新線として、今年6月14日に開業した。この副都心線は、2012年度を目途

に東急東横線と直通運転を行う予定であり、埼玉県南西部方面から都心を経由して、横浜方面に至る広域的な鉄道ネットワークが完成することとなっている。開業にあたり雑司ヶ谷駅～渋谷駅の7駅が新駅として建設されたので、そこでのバリアフリーの取り組みについて説明する。

## 移動円滑化を図った経路

駅全体には、移動円滑化された経路として、地上からホームまでスムーズに移動できるようにエレベーターを設置し、ワンルート以上の経路が確保されている。今回整備されたエレベーターは、ストレッチャー対応としている(=写真①)。

エスカレーターは、地上からホームまでの主な階段に上下2台が設置されており、行き

先は音声案内装置で案内されている(=写真②)。

階段は、踏面の端部には段が認識できるように明度差をつけ、蹴上げ16cm以下、踏面は32cmを標準とし、勾配を緩くし、上り降りをしやすくしている。階段両側には2段手すりを採用、手すり端部には点字案内が設置され、行き先を案内している。

視覚障害者誘導案内用設備としては、日本工業規格(JIS)に基づく視覚障害者用誘導ブロックを敷設し、視覚障害者だけではなく弱視のお客様にも配慮している(=写真③)。

## よりわかりやすいサインシステム

サインシステムは、東京に初めていらした方、ご高齢な方、小さなお子様をお連れの方、地下鉄に乗り慣れていない方にもわかりやすいデザインを目指し、04年4月より新しいサインシステムに変更してきた。色彩でのわかりやすさとして、ブルーを乗車系、イエローを降車系として表している。案内は、お客様が電車を降車され、ホームのサインを確認して地上の目的出口までスムーズに案内、誘導されるように計画している。

切符売り場は、車いすの方にもスムーズに購入できるように斜め式の券売機を導入し、その下部にはフットスペースを設け、券売機

に近接してきっぷを購入できるようになっている。

改札には幅広型自動改札機を、駅員がいるウィンドラッチ側に設置し、お客様が安心して通行できるようになっている。

## 多機能トイレの設備を拡充

旅客トイレは男女別の多機能トイレを併設し、「安心して気持ちよく利用できるトイレ」を目指し計画した。安全性、容易なアクセスを考慮し、設置位置は改札付近とし、トイレ入口付近のスペースの拡大や見通しのよい配置計画を行った(=写真④)。

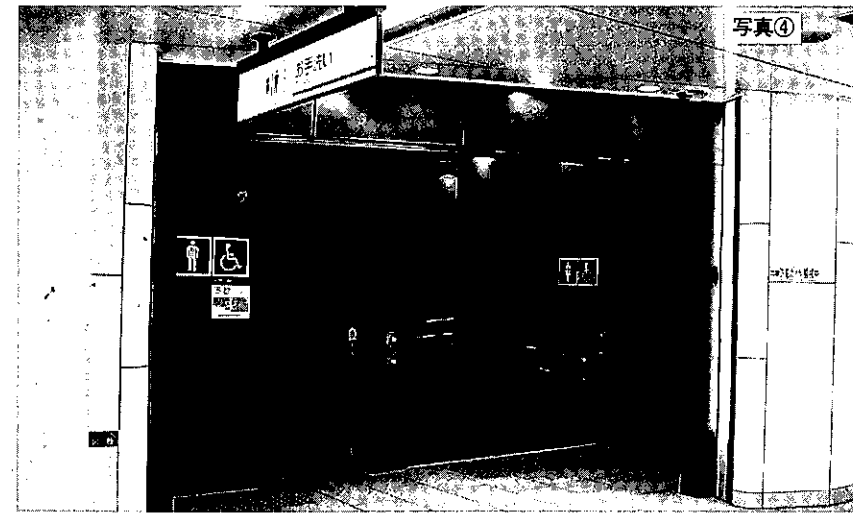
各設備は、小便器の低リップ型への変更、ライニング幅の拡幅、荷物や傘などを掛けるためのフックの拡充を行った。

多機能トイレは、誰もが使いやすいように「オムツ換えシート」「フィッティングボード」「パウチ等の洗浄水洗装置」などの各設備の拡充を行った。

## ホームベンチと可動式ホーム柵

ホームベンチは、座面高さを立ち上がりやすい42cmとし、座面幅はゆったり座れるように42.5cmとした(=写真⑤)。雑司ヶ谷駅と西早稲田駅は、上り下りでホームが分かれる単線の「シールド駅」であり、ホーム中間にベンチを設置するスペースがないため、壁付ベンチを設置した。

ベンチは各駅のデザインコンセプトを反映したデザイン画を入れており、ベンチから駅



写真④

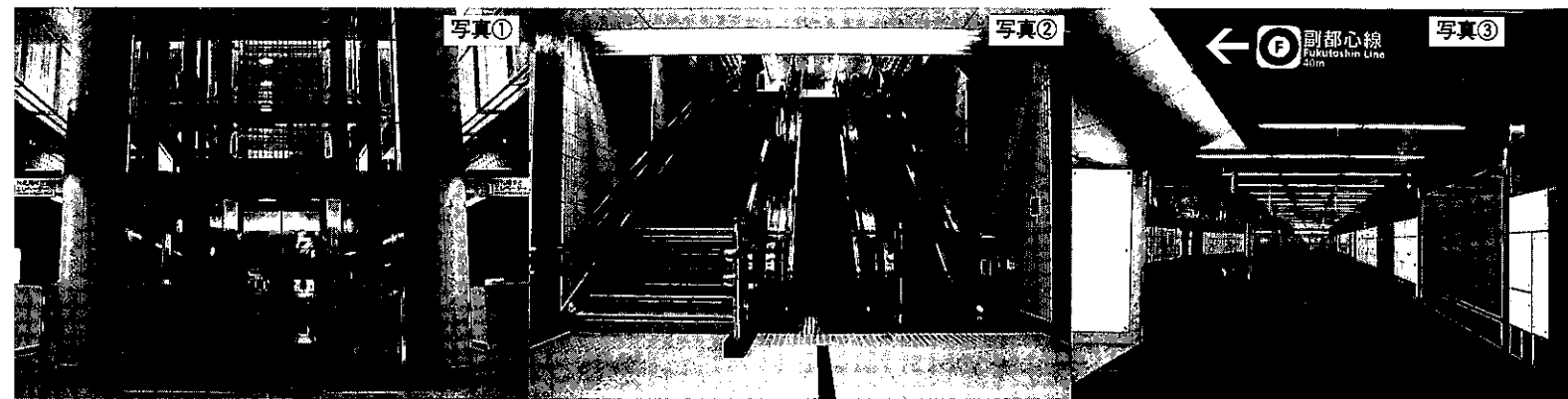
を楽しんでいただくための試みも行った。

可動式ホーム柵が小竹向原駅～渋谷駅に設置されている。副都心線は、他社との相互直通運転を行っているため、各社の車両に対応できるようなホームドアとなっており、大開口ドアが特徴になっている(=写真⑥)。

併せて、車両とホームの間隙が広い箇所には稼動ステップが設置されている。可動式ホーム柵と連動しており、ドアが開くとステップが張り出し、閉じると格納するようになっている(=写真⑦)。

副都心線は、東京メトロで最後の新線として誰にも使いやすく、安全で快適な駅を目指した。今後さらにお客様へ快適に利用していただくために、ハード面だけではなく、ソフト面における心のバリアフリーにも社員一同努力していきたい。

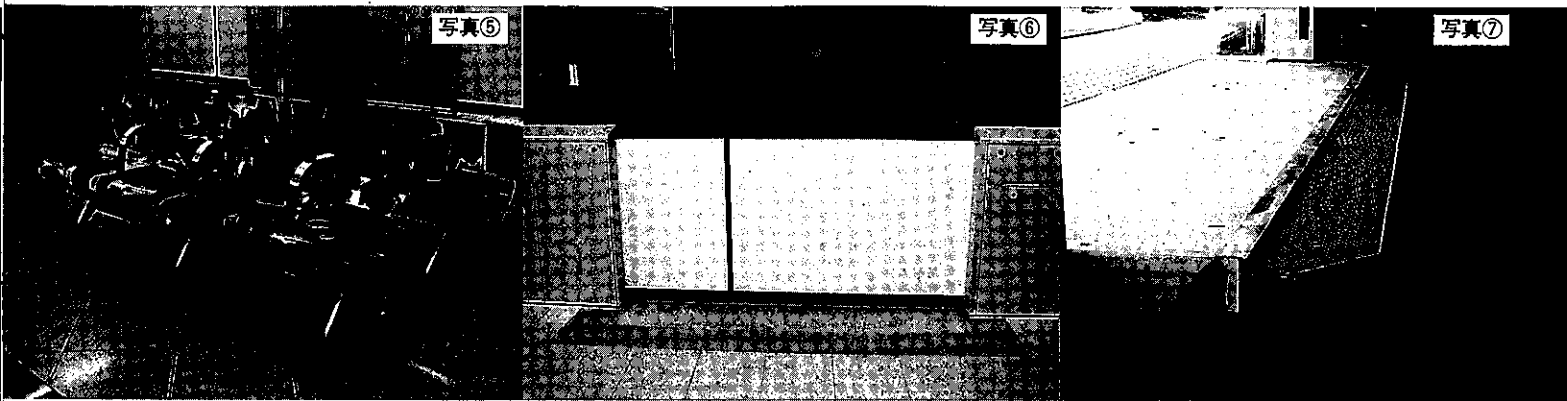
(本稿は7月14日の法人賛助会員報告会での講演内容について、改めて古賀氏にご寄稿いただいたものである)



写真①

写真②

写真③



写真④

写真⑤

写真⑦

## アクセシブルデザイン普及に向けて、協力を呼び掛け 機構、世界盲人連合(WBU)総会で発表

財共用品推進機構は、スイス・ジュネーブで8月18～22日に行われた世界盲人連合(WBU)の定期総会に参加した。その技術委員会で、国際標準化機構(ISO)におけるアクセシブルデザイン(AD)の標準化の現状を紹介し、併せて、今後の標準化の推進に向けてWBUや各国の視覚障害者機関の協力を要請するための発表を行う機会をいただいた。その模様を報告する。(松岡光一)

WBUの総会は4年に1回開催され、役員の変更、4年間の活動報告が大きなテーマとなっている。今回は参加119カ国、代議員票329(委任状98を含む)、全体の参加者は300人にのぼる大規模な大会となった。

その中の技術委員会で、機構から参加した高橋玲子さんが「国際標準規格としてのアクセシブルデザイン——その現在と将来の展望」と題して、プレゼンテーションを行った。

この中で高橋さんはまず、日本におけるADの現状について紹介。「日本では、産官学が協力して各種製品・サービスのアクセシビリティの改善・向上に努力しており、シャンプー容器のギザギザ、牛乳パックの切り欠き、携帯電話などの凸記号といった触覚識別マークが通常の商品市場で幅広く普及している」と説明。さらに、「公共トイレのボタンの位置関連を定めたJISも作成した」ことを紹介した。

続いて、ISOにおけるADの国際標準化のこれまでの歩みと現状を紹介。「ISOでは日本の発議によって、規格作成における高齢者・障害者のニーズへの配慮ガイドである『ISO/IECガイド71』が制定されたが、その作成作業には自分も参加した」こと、そして現在、「ガイド71を運用するためにISOの人



■WBU総会の技術委員会で発表する高橋玲子さん

間工学技術委員会(TC)が有用なデータ集となる技術レポートの作成を進めており、今後はこれを基に、具体的な規格が作成されることになる」、「ISOの人間工学技術委員会の中に、新たにアクセシブル・デザインに関するアドバイザー・グループ(ADAG)が設立された」といった事項について説明した。

発表の締めくくりとして、高橋さんは「本日ここに出席されているWBUの皆さんもADAGに対して積極的に助言や意見を出してほしい。また、WBUが組織として、ISOのさまざまな活動に参加してほしい」と協力を呼び掛けた。

同じ全盲の立場から、流暢な英語でAD推進の必要性を訴えた高橋さんの発表は、出席者の間で大きな感動を与え、高い関心を引き起こした。発表後、何人もの参加者が高橋さんに「素晴らしい発表だった」と話しかけてきたほどであった。

翌日の技術部会でも、元英国内務大臣のプランケット氏から「トイレのフラッシュボタンの位置については、英国でも標準化に向けて検討していきたい」との発言があり、WBUとしての今回の決議文にもISOへの協力が採用されることになっている。

今後も、いろいろな国際障害者団体の総会や会合の場でこうした発表をできる機会を得ることができれば、ADの普及推進に大きく役立つことができると強く感じた。

## 自分だけの「バリアフリーブック」を作ろう！ 国立科学博物館「夏休みサイエンススクエア」に共用品ブース

8月19～21日の3日間、財共用品推進機構は(財)国立科学博物館(科博)が主催する「夏休みサイエンススクエア」に、共用品のブースを出展させていただいた。

「サイエンススクエア」は科博が毎年、夏休み期間中に開催しているイベント。子供たちが科学に触れ、親しむことができるように、実験・観察・工作を中心としたワークショップ形式のさまざまなプログラムを実施している。その一環として今年初めて、共用品に関するイベントを開催させていただいた。

具体的な内容は、『「バリアフリーブック」を作ろう！』というテーマで、身近な共用品の工夫を発見し、子供たち1人ひとりが「バリアフリーブック」(ワークブック)を作成するものである。「バリアフリーブック」の基本フォーマットは、子供たちが自分なりの視点で発見した「工夫」が書き込めるようになっており、出来上がった「バリアフリーブック」は世界にたった1つだけの自分自身のバリアフリーブックになる。

来場者の中には「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」「共用品」を知らない子供や保護者も多く、はじめは「何を体験できるのか？」と不安顔な人もいた。だが、実際に取り組み始めると、所要予定時間の30分を

はるかに上回るほどに真剣に取り組まれる来場者が大半で、そんな姿がとても印象的だった。

また、共用品のブースには、知的障害のあるお子さんや、肢体不自由のお子さん、障害のある保護者の方々も参加していただき、文字通り、身体特性や障害の枠を超えたバリアフリーの楽しいブースとなった。

### 「自然科学」と「共用品」の関係を考える

そもそも「自然科学」と「共用品」の間には深いつながりがあるのだが、一見してその共通点を見出すことは困難であり、今回の科博でのイベント開催は必ずしも容易ではなかったと推測する。しかし、石川昇広報課長をはじめ、久保晃一さん、福井彰さんら科博の広報・サービス部広報課の皆さまのご理解とご尽力のおかげで、無事に出展することができ、来場者の方々の共感を得ることができたことは、機構にとって大きな財産となった。

「共用品を知る機会をいただいて感謝しています」と何人もの保護者の方から過分なお言葉をいただいたが、私たちが子供たちに「共用品の心」を伝えるこうした機会をいただいたことに深く感謝している。(森川美和)



■科博で開催した「夏休みサイエンススクエア」の共用品ワークショップには、多数の子供たちや保護者が参加した

## 跡見学園女子大生、機構で就業体験研修 科博「サイエンススクエア」では指導員に！

今夏も(財)共用品推進機構は、大学生の「就業体験(インターンシップ)研修」を実施した。参加したのは前年と同様、跡見学園女子大学の学生2名で、2週間研修を行った。

2人の大学生は実施期間中に、前述の国立科学博物館が主催する「夏休みサイエンススクエア」にも指導員スタッフとして参加していただいた。その貴重な体験を通じて得た発見や感動を織り交ぜ、今回の就業体験研修についての感想文を書いてもらったので、ここで紹介したい。(森川美和)

### 『インターンシップを通して』

あおやぎ りょう  
青柳 綾

私は共用品推進機構で2週間、インターンシップをさせていただきました。

私がここをインターンシップ先に選んだ理由は、祖母の入院でした。高齢ということと手術をしたことが重なり、全身の筋肉が落ち、歩くことも困難になってしまいました。そんな祖母を見て、私にできることはないかと思っていた時、「共用品」という言葉を知りました。

私は今まで「共用品」という言葉を聞いたことがありませんでした。どんなものなのか調べてみると、シャンプー容器の側面に付いているギザギザ、色付きのスティックのりなど、私たちが普段当たり前のように使っているものが共用品であることがわかりました。

共用品についての説明を聞き、実際に触ってみることで、どのように障害のある人や高齢者に対する配慮がされているのかがよくわかりました。

インターンシップ期間中の3日間、「夏休みサイエンススクエア」にスタッフとして参加させていただきました。ここでは、小中学生を対象とした共用品についての講演、バリアフリーブックの作成を行い、私自身もバリア

フリーブック作成の補助をしたり、実際に講演もさせていただきました。

実際に触れることで興味を持ち、楽しみながらさまざまな発見をしていく子供たちの姿がとても輝いて見えました。子供だけでなく、保護者の方々も興味を持って参加してくれたことが嬉しかったです。

共用品について学んでからは、いつもと違った視点で物を見たり、「どこか配慮されている点はあるのだろうか」と考えるようになりました。家族に共用品について説明をして、どんなところに共用品があるかを皆で探したりもしました。

祖母の入院がきっかけで興味を持った私のように、共用品を知らない人がまだまだたくさんいると思います。そんな人たちに、自分だけが使いやすいものばかりに目を向けるのではなく、周りにも目を向け、ちょっとした工夫で誰にでも使いやすいものがあるということを知ってほしいと思いました。そのためにもっと共用品について学んで、共用品を広めていきたいと思っています。

祖母が少しでも生活しやすいように、共用品を勧めようと思っています。

### 『サイエンススクエアを通して』

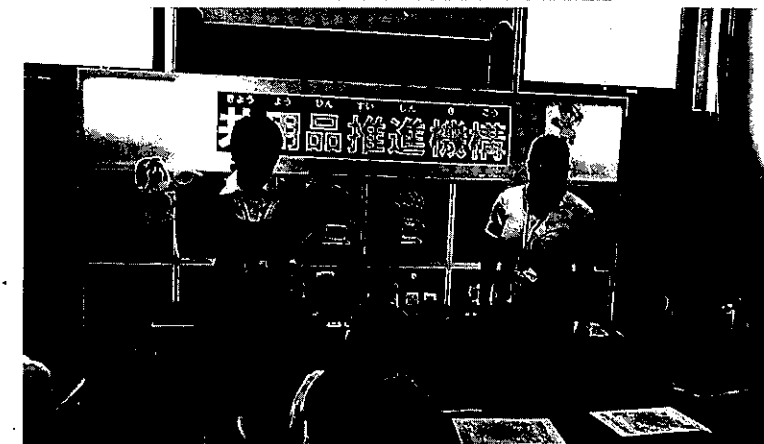
すわ あやか  
諏訪 彩香

8月19~21日の3日間、上野の国立科学博物館で「夏休みサイエンススクエア」スタッフの補助員を体験させていただきました。

初日、普段関わることのない子供たちに、どのように接していいのかわからず戸惑いました。しかし実際に接してみると、子供たちの元気に不安や緊張も吹き飛びました。そして講義後にバリアフリーブックを作成している子供たちは、最初とは打って変わって、とても真剣で一生懸命でした。共用品を通して子供たちと触れ合っていく中で、子供たちの考え方、言動はとても率直で予想外なことばかりでした。そして自分にもこのような時があったにもかかわらず、今はいかに常識にとられてしまっているのかわかりました。

2日目には自分たちが実際に講義をする場面がありました。事前に流れやどのように伝えるかを打ち合わせしたもの、前に出てみると考えていたほどスムーズにはいきませんでした。頭ではわかっているのに、人に伝えるとなると大変だということに気がきました。イベント後、現役の先生に子供たちに教えるには、物と物を比較する教え方、子供たちの年に合わせた説明の仕方など、工夫が必要だということをお話いただきました。人に伝えるということは、とても大事なことであり、同時に工夫をしなければ伝わらない時もあるということに気がきました。

この3日間に、外国人の方、耳の不自由な方、知的障害のある方、小さな子からお年寄りの方までさまざまな方がみえました。その中で思ったことは、外国人の方には英語、耳の不自由な方には手話を使えば共感できるということです。当たり前のことですが、今回のイベントを通して、みんなで共感できると



■科博「夏休みサイエンススクエア」で子供たちに共用品を教える諏訪彩香さん(左)と青柳綾さん

いうことはとても素晴らしいことだと改めて感じました。そして、自分は今までとても狭い世界で生きていたのだなと気がきました。

共用品を学んでいくうえで「共用品の第一歩は他人のことを知る」と学びました。世の中にはさまざまな人がいます。身体が不自由な人、背の高い人、低い人、右利きの人、左利きの人、お年寄り、赤ちゃん……誰もが使いやすい、生活しやすいのが共用品です。共用品は誰にでも密接に関係しています。今回の「サイエンススクエア」を通して、この共用品をもっと多くの人に知ってもらいたいと今まで以上に思うようになりました。共用品推進機構のブースに来た子供たちが、大きくなった時、心の片隅に覚えていてくれたらいいと思います。

共用品推進機構のインターンシップでは、短時間に多くの方に会い、話をし、本も読みました。そして、自分の身の周りの物への見方、考え方が変わりました。今まで海外旅行に行っても気にも留めなかった海外のバリアフリー事情のお話を聞いた時は「もったいないことをしたな」と反省しました。

1つの考え方を知っているだけで吸収できるものは増えるということを知りました。自分に足りないものも見つけることができ、目標もできました。これからは、少しでも多くのことを吸収できたらと思います。



たまき かつし  
玉木 克志 (アイホン(株)商品企画室)

共用品推進機構が財団法人になって10年目を迎えると聞き、関係者皆さんの活躍に敬服すると共に改めて月日の早さを感じる。

私が共用品と出会ったのは機構の前身、E&Cプロジェクトの時代。日本福祉大学の主催する異業種交流会「三水会」で1998年5月、E&Cプロジェクト名古屋の代表者であるデザインオフィス「アヴェニュー」の小塚武志氏から「共用品」についての講演を聞いたのが始まりである。

### 共用品との出会いはE&C名古屋から

共用品の考え方やシャンプーのギザギザ、プライベートカードの触覚識別の話はとても新鮮で、会社の朝礼ネタにしたり、あちらこちらで共用品の話をした。皆、帰宅後にシャンプーのギザギザを確認し、なるほどと納得していた。その後、E&C名古屋の活動にボランティアとして参加するようになった。

同じ年、弊社は創立50周年を迎え、記念イベントとして全国で「アイホン新技術・新商品フェア」という内覧会を行った。その中で講演会を行うこととなり、ご登場いただいたのがE&Cプロジェクト事務局長の星川安之氏である。星川氏には東京・大阪・名古屋の3会場で「ユニバーサルデザインとは」と題して講演していただいた。受講者は皆、私と同様に共感し、ある大手住宅メーカーの方からは「感動した。より詳しい説明を」との話も頂戴した。

共用品がとても身近になった出来事があった。2000年春、父がALS（筋萎縮性側索硬化症）に罹患した。ALSは運動ニューロンが変性していく病気で、症状が進行するにつれ身体が動かなくなる不治の病である。日本には7700人ほどの患者がいる。父の症状は球麻痺（舌や喉の筋肉が弱まり、嚥下障害や音声障害が起こる）から始まった。何を言っているのか、全くわからない。筆談にしたが、ベッドに仰向けのままでは紙にうまく字が書けな

い。

そこで、私が趣味のスキューバダイビングで使っていた「水中ノート」（磁石のペンと砂鉄を利用して海中で筆談する小型のボード）を使用してみたら、うまくいった。海の中では重力から解放される一方、一時的に音声障害と聴覚障害を経験する。水中ノートは保持性もよく、何度でも書き消しできるので父には重宝した。「これは共用品だ」と思った。気丈に闘病生活を送った父は翌年の2月に他界した。以来、日本ALS協会愛知県支部で患者・家族の支援活動をしている。



### 障害者のためにワイヤレス呼出機を工夫

ALS患者の切なる要望に、在宅療養での家族とのコミュニケーションがある。「せめて家族の呼び出しだけでも簡単にできる装置がほしい」との願いである。そこで、弊社のワイヤレスの呼出装置「ワイヤレスホームコール」の発信機に3.5mmのミニプラグを付けてみた。これにより福祉用のスイッチやセンサーが接続可能となった。この装置は03年の日本リハビリテーション工学協会の福祉機器コンテストで最優秀賞をいただいた。

07年3月に「公共トイレにおける便房内操作部・器具の形状・色及び配置」に関する日本工業規格（JIS）が制定された。共用品推進機構も大変尽力された。弊社はTOTO様とのコラボレーションで新JISに準拠したトイレ用呼出ボタンを開発した。今後、広くパブリックトイレに設置されていくと思う。現在、社内には少人数ではあるが、ユニバーサルデザインに取り組む有志がいる。これからは会社のレベル、また個人のレベルで「共用品」を推進していけたらと願っている。

(題字は中野奈津美・財共用品推進機構運営委員)

## 筋萎縮性側索硬化症と共に闘い、歩む会

筋萎縮性側索硬化症（ALS）は、運動神経が侵されて筋肉が萎縮していく進行性の難病で、発症のメカニズムはまだ解明されていない。ニューヨーク・ヤンキースで活躍した“鉄人”ルー・ゲーリックがこの病のためにわずか38歳で夭折したことや、英国の宇宙物理学者・ホーキング博士がALS患者であることで知られ、国内には約7700人の患者がいると推定されている。

日本ALS協会は患者とその家族らが中心となって1986年に設立した支援団体で、会員数は現在約6000人、うち患者は約2000人となっている。主な活動としては、①医療・福祉の支援拡大に向けた国・自治体・医療機関への働きかけ、②交流会開催など会員相互間の情報交換・交流の促進、③機関誌『JALSA』の発行など情報発信と社会への啓発、④介護技術の普及と向上、⑤ALS基金による病気の原因究明や治療法の研究開発助成——などに取り組んでいる。

### 難病患者・家族のQOL向上めざす

特に力を入れているのが、患者や家族の生活の質（QOL）の向上。そのため、在宅療養介護体制の充実、意思伝達装置の普及などコミュニケーション支援体制の整備などに重点的に取り組んでいる。例えば意思伝達装置では、眉毛や唇のわずかな動きに反応するスイッチの実用化に続き、近年では脳の反応を直接捉える「脳スイッチ」（ブレン・マシ



●ALSに倒れたルー・ゲーリックにちなみ、「イオン日米野球2006」の開催に合わせて東京ドームで行われたALS患者支援のための募金活動の様相


### ■日本ALS協会 (JALSA)

設立 1986年  
会長 橋本 操 (はしもと・みさお) 氏  
事務局 〒102-0073 東京都千代田区九段北1-15-15 瑞鳥ビル1F  
問い合わせ先 TEL: 03-3234-9155 FAX: 03-3234-9156  
ホームページ <http://www.alsjapan.org/>

ン・インタフェース)の研究開発も進んでおり、介護環境改善への期待が高まっている。

同協会では「ALSは家族の介護負担が大きい病気。逆に言えば、ALS患者の家族はノウハウを持っているわけで、そうした知見を他の難病患者・家族とも共有し、社会全体で医療・介護のノーマライゼーションを実現させていきたい」（川口有美子理事）としている。  
(高嶋健夫)

<アクセシブルデザインの普及に向けて一言>  
“世界一の外出先進国”をさらに発展させるために  
川口有美子・日本ALS協会理事/東京都支部



呼吸器付きの「リクライニング車いす」で外出するALSの患者さんを街で見かけたことはありませんか？ 日本での人工呼吸器の装着率は30%。数%に満たない欧米に比べて群を抜いて高く、日本は「世界一の外出先進国」なのです。これはALSの患者や家族が積極的に外に出るよう長年努力を重ねてきたことと、交通機関や医療関係者など周囲の支援・協力があつたことの結果だと言えます。

けれども、世の中にはまだまだ多くのバリアが存在しています。例えばエレベーターの多くは狭く、リクライニング車いすでは乗り込めません。公共トイレも同様です。人々の無知や無理解も根強く残っています。社会の認識や制度が患者さんの頑張りには追いついていないのです。社会全体を共用品化していく取り組みがこれからも求められます。

(談)

## <寄稿>

# 全盲者の立場で「模擬裁判」の裁判員役を務めて

高橋玲子・(株)タカラトミー安全・環境統括室社会環境課係長

市民が刑事裁判に参加する「裁判員制度」が来年春から実施されます。そのシミュレーションである「模擬裁判」が東京地裁で開かれ、7月17・18日の2日間、初の全盲者として私も裁判員役を務めました。この間、別の法廷では同じ事件を題材に聴覚障害者1名を交えた模擬裁判が行われていたようです。

内容は、ナイフで人を刺した被告が殺人未遂罪で起訴された事件で、被告が殺意を否認しているという設定。傷口の数や深さ、凶器の種類なども検討しながら、犯行時の被告に殺意があったか否かが主な争点となりました。一般市民からなる裁判員6名と、裁判官3名が裁判に立ち会い、評議を経て罪名と量刑とを決定しました。

## 誰にも有益な「視覚情報の言語化」

法廷では、裁判官も、検察・弁護人も、私の存在をかなり意識され、事件現場の写真や犯行状況を表す図面などをとてもわかりやすく言葉にしてくださいました。被告が黙ってうなずくと、「返事は声に出すように」などと促されたりもししていました。

裁判長が後のメディア取材で「視覚障害者に配慮することによって、審議が妨げられると感じたことはなかったか」と尋ねられ、「視覚情報を言語化することは、自分自身にとっても細かい点の確認の機会となり、かえってよかったと思う」と答えてくださったと聞き、ほっとしました。裁判員の方たちも大半が、私を意識してなされた丁寧な説明や重要なポイントの繰り返しについて、「わかりやすくよかった」と評価してくださいました。

点字の資料としては、スケジュール、宣誓書、起訴状がタイムリーに提供され、後から

論告もいただきました。当日の案内も事前に墨字と点字で郵送していただき、その中に霞ヶ関駅から裁判所までの行き方が言葉で書かれたものもあって、とても助かりました。

## 必要に応じた「人的支援」は要検討課題

私は法廷で、気になった言葉の言い回しや話された事柄について、11枚の紙にびっしりとメモを取りました。もしメモを取ることができなかつたら、かなり心細かったです。独力で大量のメモを取りにくい人の場合には、例えば気になったところで合図をすると、代わりにメモを取ってくださるような人的支援が必要なのではと思います。評議の場で安心して（自信をもって）意見を述べるには、記憶よりも確実な、自分が読みやすい記録を持っていることが重要と私は感じました。

視覚情報については「なんでも質問していい」と事前に言われていたのですが、目が見えていれば一目瞭然と思われるような内容をどこまで質問していいのかわかり、やはり当事者は悩んだり、気がひけたりするものです。その面でも、人的支援（アシスタント）を用意していただければ非常に心強いし、「一目瞭然と思われることでも質問してください。1人の裁判員として、最善を尽くして評議に臨むことは貴方の権利であり、義務でもあるのです」と、強く促していただくことも必要かもしれません。

交通事故など、現場の状況や位置関係などがもっともっと重要になる事件の場合には、その言語化は非常に大変だと思います。状況や図面の言語化の方法については、ベテランの音訳グループなどのノウハウを取り入れて、ある程度マニュアル化することも今後の検討課題と感じました。

## ●ニュース&トピックス

# 『2008年版JISハンドブック 38 高齢者・障害者等 [アクセシブルデザイン]』

「高齢者・障害者配慮設計指針」(ガイド71)をはじめ、アクセシブルデザイン(AD)に関連する日本工業規格(JIS)の全容を完全網羅したガイドブック。収録規格数は67で、「高齢者・障害者配慮JIS」シリーズのほか、用語、義足、義手、装具、感覚障害機器、排泄関連用具、ベッド、車いすおよびつえ、移動機器、リスクマネジメントなどのJISを収めている。

巻頭には「JIS Z 8071(高齢者及び障害の

ある人々のニーズに対応した規格作成配慮指針)からの発展」と題して、機構の星川安之専務理事と(独)産業技術総合研究所人間福祉医学研究部門上席研究員の佐川賢氏がAD関連規格に関する整備の経緯について解説した論文を寄稿している。



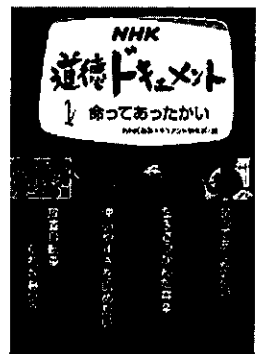
発行：日本規格協会  
価格：8400円  
体裁：A5判・1320ページ

# 『NHK道徳ドキュメント1 命ってあったかい』

NHK教育テレビで放映された同名の番組をノベライゼーション化した子供向けの教育読本で、本書の第3話として、機構・星川専務理事が出演して昨年オンエアされた『使いやすさを広めたい』の回が収録されている。

『使いやすさを広めたい』は、共用品を通して、子供たちに「共生」や「障害」とは何か、さらには共用品が誕生した背景などにつ

いて、自分自身の視点で考えることを促す内容になっており、放映時には教育関係者など多方面に大きな反響を呼んだ(詳細は、本誌第49号p12~13を参照)。



編さん：NHK道徳ドキュメント制作班  
発行：汐文社  
価格：1680円  
体裁：A5判・145ページ

# 『R60マーケティング「年を取った若者たち」のハートをつかむ』

団塊世代をはじめとする60歳前後のいわゆる「アクティブシニア」の攻略法の実践的解説書。著者は本誌編集長・高嶋と機構の法人賛助会員企業であるアサツーディ・ケイ(ADK)プロジェクト開発局国際博覧会室副部長・プロデューサーの福岡順作氏。

多数のシニア消費者や企業への取材と、ADKが独自に実施した「生活者総合調査」の結果から、「新しいシニア」の実像に迫っている。調査からは「夫婦仲良しシニアvs子・孫がより所シニア」、「まだまだ女磨きシニアvsもう頑張らないシニア」、「オタクシニ

アvs社交派シニア」など20の対決を設定して、特性を探っている。

また、INAX、松下電工、東京ディズニーリゾート、タカラトミー、ソニー、日産自動車、京王百貨店、セブン-イレブン・ジャパン、NTTドコモ、ステッキのチャップリン、京都観光など多数のヒット商品事例も収録している。



著者：高嶋健夫・福岡順作  
発行：日本経済新聞出版社  
価格：1785円  
体裁：四六判・264ページ

(高嶋健夫)

## 「伝統的工芸品と共用品」

後藤芳一 (財共用品推進機構運営委員、日本福祉大学客員教授)

「伝統的工芸品」は、100年以上日常生活に用いられてきた。「持続的で普遍的な価値を持つモノ」という点で、**共用品**③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿(小さい添え字①～⑯は、同様の用語が本講の第1～53講に既出であることを示す)の先輩格であり、共用品開発の苗床にもなる。

### 1. 伝統的工芸品の概要

(1)制度 「伝統的工芸品」の呼称は、「**伝統的工芸品産業の振興に関する法律**」(略称「**伝産法**」、1974年施行)で定められている。産地組合などからの申請を受けて**経済産業大臣**②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿が指定する。指定を受けた伝統的工芸品は、個々に「**伝統マーク**」を表示できる。

(2)現状 伝統的工芸品は全国で210品目(2008年8月現在)が指定されている。業種別には、織物(33品目)、陶磁器(31)、漆器(23)、木工・竹工品(28)、金工品(13)、文具(9)、工芸用具・材料(3)などがあり、津軽塗(漆器、青森県)から琉球漆器(漆器、沖縄県)まで、1773億円(2006年度)の産業である。

### 2. 伝統的工芸品の要件

伝産法は、伝統的工芸品の要件として以下の5つを定める。主に日常生活で使われる工芸品である(要件1)、製造工程の主な部分が手作りである(要件2)、伝統的な技術や技法によって製造されるものである(要件3)、伝統的に用いられてきた原材料である(要件4)、一定の地域で産地が形成されている(要件5)。

「伝統的」(要件3、4)とは100年以上続くこと。工芸品の技術や技法は、多くの作り手の工夫を経て確立する。「一定の地域」(同5)とは、10企業か30人以上の製造者があって地域産業として成立しており、それによって、産地全体としての責任に裏付けられ、信頼性が得られる。

### 3. 伝統的工芸品と共用品

#### (1)用具としての伝統的工芸品

伝統的工芸品は、個々の製品が人の手に触れ

る工程を経るので人間工学的に妥当な寸法や形になり、安全性も備える(要件2)。100年以上続けて製造・利用されることで吟味され、人や自然と調和する材料が用いられる(要件3)。長い間に多くの人に関わることで、使いやすさや完成度が増し、色・紋様・形は生活や文化と深い関わりを持つ(要件1)。

#### (2)伝統的工芸品の今日的意義

①ゆとりと豊かさをもたらす質の高い製品へのニーズ、②地域独自の文化を見直す動き、③「和」の暮らしやものづくりへの再評価、④欧米での「和」の生活様式への関心、⑤循環型社会を体現する産業という評価——など、今日的意義がある。

#### (3)共用品としての意義

共用品は、不便さ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿への対応と容易な需給を目指す半面、工業的製法で供給される製品が中心である。この結果、長期間供給されることを強い要件としていない。一方、伝統的工芸品は、100年を超えて作り手や使い手に磨かれることにより、幅広い利用環境や多くの利用者に用いられている。共用品に「時代を超えて用いられる」という要件を課す場合には、伝統的工芸品の事例が先例として参考になる。

### 4. 事例

「**その他繊維製品**」では伊賀くみひも(三重県)、「**陶磁器**」では伊万里・有田焼(佐賀県)、「**漆器**」では輪島塗(石川県)、「**木工品**」では大館曲げわっぱ(秋田県)、「**金工品**」では南部鉄器(岩手県)や堺打刃物(大阪府)、「**和紙**」では美濃和紙(岐阜県)、「**文具**」では播州そろばん(兵庫県)や熊野筆(広島県)、「**その他工芸品**」では京扇子(京都府)や丸亀うちわ(香川県)、「**工芸用具・材料**」では伊勢形紙(三重県)、庄川挽物木地(富山県)や金沢箔(石川県)などは共用品に通じる。

(本講は財伝統的工芸品産業振興協会の記述(<http://www.kougei.or.jp/>)を参考にした)

## 騒音の中で生まれた「共用サービス」 渋谷と東京ドームで目撃したある光景

星川 安之



事務局 長  
だより

☆…8月のお盆の時期、「共用品のことをもっと知りたい」と、山梨県甲府市の小学5年生の男の子がお母さんと一緒に事務所にやって来た。その時に聞いた話。

彼の隣のクラスには、補聴器をしている女の子がいる。彼女の補聴器には、みんなが椅子をずらす時の音が雑音となって響く。

それを知って、同じクラスの子供たちが、音が出ない方法はないかと知恵を絞った。椅子の4本の足に、穴を開けたテニスボールを履かせてみた。そのアイデアは、大成功。音がやみ、今では彼女がいる上の階のクラスの児童たちも、このアイデアを採用しているとのことだった。

☆…先日、夕方の混雑時、渋谷のデパートの食品売り場を通りかかったら、ケーキ屋さんの前で店員さんが、本日のお勧めのケーキを言葉で説明している。彼女は大きな声で呼び掛けながら、そのケーキの写真、商品

名、価格を書いたA3大の“宣伝ボード”を頭上に掲げていた。この宣伝方法は、言葉が聞こえない耳の不自由な人にとってはとても役に立つ素晴らしいアイデアである。

もっとも、お店側はおそらく、混雑時の騒音の中では声を張り上げてよく聞こえないという理由で、さらには、少し遠くを歩く人にも気づいてもらえるようにと考えたもので、耳の不自由な人への配慮までは意識したわけではないだろう。

☆…都市対抗野球の観戦に行った東京ドームでも、同じような光景を目撃した。一塁側も、三塁側も出場チームの会社や所在地の町の人たちでぎっしり満員。しかも、太鼓、ラッパ、掛け声が休むことなく続くお祭り騒ぎで、隣の人の声もよく聞こえない。そんな喧噪の中、観客席を歩き回り、ビールやコーラなどを販売する売り子さんたちの様子をそれとなく観察していたら……。

紙パックのソフトドリンクを販売している売り子さんが、なんと、渋谷のデパートの店員さんと同じように、お茶、ジュース、コーヒーの紙パックの写真と値段を書いたボードをかざしながら、注文を受けていた。これもまた、結果としては「共用サービス」になっている。

☆…いずれも、「騒音の中でお客さんどのようにコミュニケーションを図るか」という課題解決に向けた苦肉の策だろう。だが、その課題を解くことによって、耳の不自由な人たちにも情報が届くようになる。

甲府の小学校のように、不便さを知り、みんなで解決する方法を考え、実行し、広げる取り組みは見事だと思う。2つのボードも、たとえ耳の不自由な人を想定していなかったとしても、その「偶然」が「配慮」に変わるとしたら、それはそれで見事と思うのだが、いかがだろうか。(★)

## 共用品通信

### 【トピックス】

○花王、「暮らしのボイスガイド2008年版」を発行  
今年で10回目となる視覚障害者向け音声情報デザイン版CDを制作し、全国の盲学校、点字図書館などに配布。希望者には無料で送付する。問い合わせは同社コーポレートコミュニケーション部門社会貢献部(TEL:03-3660-7057、FAX:03-3660-7994)まで。

### 【委員会】

○第1回アクセシブルデザイン検討委員会(本委員会)(7月3日)  
○第1回アクセシブルミーティングWG(8月1日)

### 【講義・講演】

○日本点字図書館で講義(7月22日)  
「身近な共用品を知ろう」をテーマに森川が講義。  
○首都大学東京で講義(7月30日)  
「超高齢者に求められるアクセシブルデザイン」と題して星川が講義。  
○世田谷社会福祉協議会で講義(7月30日、8月23日)  
同協議会の「共用品講座」で森川が講義を担当。

○財全国建設研修センター「平成20年度ユニバーサルデザイン研修」(9月3日)  
「暮らしの中のUD」をテーマに高嶋が講義。

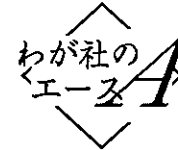
### 【来訪・来所】

○イタリアから視覚障害者の方が来所(8月1日)  
○東京未来塾 高校生就業体験(8月4～8日)  
昨年に続き、都立高校生2名が機構でインターンシップ研修を実施。

### <読者の皆様へのおお願い>

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。





# 味の素(株)「ほんだし®」 「使いやすい、おしゃれ」に容器を全面リニューアル

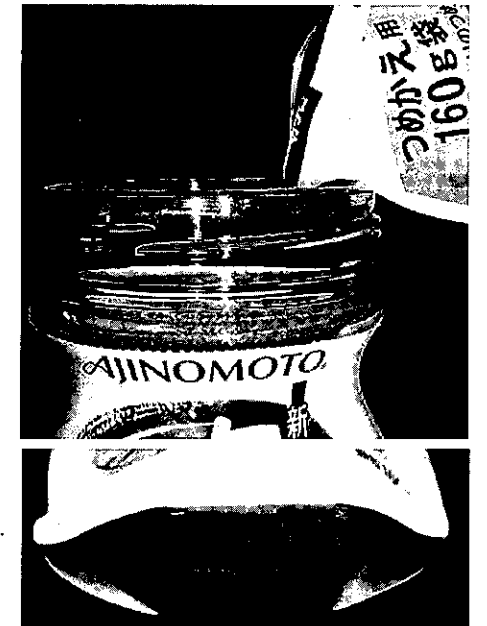


持ちやすい「くびれ」(上)と「4条ねじ」を採用した開口部



170g入り瓶(左)と詰め替え用パウチ

■味の素(株)「ほんだし®」170g瓶  
 ▼改訂時期：2007年7月  
 ▼希望小売価格：設定せず  
 ▼内容量：170g  
 ▼本体寸法：82×82×115mm  
 ▼使用量の目安(4人分)：水またはお湯600ml(カップ3)に小さじ山盛り1杯(4g)  
 ▼品種：60g瓶、詰め替え用160gスタンディングパウチ、小袋、スティックタイプなど全13種  
 ▼問い合わせ先：味の素(株)お客様相談センター(TEL：0120-688181)  
 ▼ホームページ：  
<http://www.ajinomoto.co.jp/>  
 「ほんだし®」用ホームページ：  
<http://www.hondashi.jp>



詰め替え用スタンディングパウチの側面に付いた「くぼみ」(上)とフラットボトム

味の素のロングセラー商品である和風だしの素「ほんだし」が中身を刷新したのに合わせ、包装容器を全面リニューアルして昨年、新発売された。

新しいパッケージのコンセプトは「使いやすいとおしゃれさ」。瓶容器では60g入りに加えて、170g入りを新たに発売。瓶の色を従来の茶色から、視認性の高い透明なものに改めたうえ、持ちやすいように本体上部に「くびれ」を設けたのが、最大の特徴だ。

このほかにも、きめ細かな改良

点が多い。ふたと噛み合う瓶の口に「4条ねじ」と独自開発の「周側部密閉構造」を採用。少ない力でもより開閉しやすく、同時に閉めた時の密閉性も高めた結果、湿気を従来比90%カットする高い防湿性を実現したという。

## フタの上に点字で商品名を表記

さらに60g瓶では、詰め替えがしやすいように瓶の口径を従来の53mmから61mmに拡大。また、視覚障害者に配慮して、新たにフタの上に「ほんだし」の点字表記を入

れた。

詰め替え用の160g入りスタンディングパウチにも、使いやすさを追求した新機能を探り入れている。詰め替え時に瓶の外にこぼしにくくするために、袋を開ける際に開口部が小さくなる「びん口シール」を採用すると共に、瓶に引っかかりやすいように側面に「くぼみ」を設けた独特の形状にした。また、底部には立てた時の安定性が高く、包装資材の使用量も少なく済む「フラットボトム」を採用している。(高嶋健夫)

アクセシブルデザインの総合情報誌

## インクル 第56号

2008(平成20)年9月25日発行  
 "Incl." vol.9 no.56

©The Accessible Design Foundation of Japan  
 (The Kyoyo-Hin Foundation), 2008

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 勸共用品推進機構  
 郵便番号 101-0064  
 東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F  
 電話：03-5280-0020  
 ファクス：03-5280-2373  
 Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org  
 ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子  
 事務局 星川 安之  
 森川 美和  
 金丸 淳子  
 水野由紀子  
 高橋 裕子  
 松岡 光一  
 編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 青柳 鏡  
 (五十音順) 古賀 直紹  
 後藤 芳一  
 諏訪 彩香  
 高橋 玲子  
 玉木 克志  
 山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)  
 サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、勸共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。



古紙配合率100%再生紙を使用しています